

襲のあわい——その火口<sup>ほくち</sup>⑤天理大学人間学部教授  
松田 健三郎 Kensaburo Matsuda

ハイヌウェレ型神話の一類型——マリンド・アニメ族の祭りにおける「マヨ娘」の儀礼の紹介をとおして、「代理」、「等置」、「置換」などと翻訳されたりする substitution という儀礼論の核心的術語が考察された。そして、この substitution の、たとえば「同じ」の可能はたんなる、たとえば「 $2+3=5$ 」の「同じ」とはことなつて「遮蔽」を介してのことではない——それが、前稿の理解であった。

このような、「遮蔽」を介しての「同じ」の対象は、とりあえずは「マヨ娘」にたいする「残虐な性行為」と「ヤム芋の豊饒」であった。しかし、吉田敦彦はその底に、より根源的な意味の存在を認める。古栽培民の人たちにとって、ハイヌウェレ型神話が持ってきた意味は、これまで見てきたような、作物の起源を説明するということだけで、尽きるものではなかったのだ。その血腥い殺害の儀礼にも、実は、作物を生やし、豊かに実らせるための豊饒儀礼であると同時に、それ以上に重大なものと別の意味と目的もあった。ハイヌウェレの神話には、さらなる事件がつぎのように物語られているという。

ハイヌウェレの父親アメタは、娘の両腕だけは埋めずにとつておいた。かれはそれをもって乙女サテネのところいき、ことの顛末をつぶさに告げ知らせた。彼女は、バナナの実から最初の人間が発生したとき、ひとりだけ未熟だった実から生じて人間たちを統べる立場にあった。彼女は広場に大きな門を築き、そこにハイヌウェレの両腕のおのおのを自分の各々の手にし、そしていった。

わたしは、もうここには住まない。あなた方は、殺しを犯したからだ。いま、あなた方のもとから去る。だが、あなた方はそのまえにこの門をくぐり抜けなければならない。うまくいったものは、人間でいることができる、しかし、うまくいかなかったものは違った姿をとることになるだろう。

こうして、人間たちは皆、この門をくぐり抜けようとした、あるものは成功し、あるものは失敗した。失敗したものは動物とか精霊とかになった。こうして、猪や鹿、また鳥のたぐいや魚、多くの精霊が発生してこの地上に棲まうこととなったという。

ここにうかがえることは、人間がいろいろな芋類を手に入れ、それを栽培することで文化が成立することとなったということだけではなく、このとき初めて人間は他の動物や精霊などとたもとを分かつことになったということである。翻ってみれば、これ以前、人間の祖先たちは動物や精霊たちとはまだ区別のない、いわば混沌の状態であったことになる。かれらがバナナの実から生じたというのも、いってみれば植物とも未分であったこと、また、ハイヌウェレが盛大なマロ祭りの晩に珊瑚や美しい磁器の皿、銅羅、黄金の指輪などを大便として排泄してみなに与えたといわれるのも、人間が無機物のたぐいと未分の状態であったことを示唆しているとみえよう。世界はいまだかたちをなしていなかった。吉田は結論づける。

このようにいろいろなもの<sup>もの</sup>のあいだの区別が曖昧で、混沌のようであった原古の状態に、ハイヌウェレの殺害が原

因となつて起こつた事件によって終止符が打たれた。…このウェマレーン族のハイヌウェレの話によって起源が説明されているのは、明らかにただ作物としての芋類だけではない。この話はさらに、文化の起源、そしてまた人間の起源と、世界そのものの起源まで説明した、本当にどんな言葉でも言い尽くせぬほど実に重要な意味を持つ神話であるわけだ。

さて、このハイヌウェレ殺害の神話はただウェマレーン族にかざられた話ではなく、「ハイヌウェレ型神話(傍点筆者)」とすでに言及されているように、インドネシアからメラネシア、ポリネシアをへて、南アメリカおよび北アメリカの一部にまでまたがる環太平洋の広大な地域に、その類型が流布する神話であった。日本でも、『古事記』にみられる大宜津比売神(大気都売神とも)、あるいは『日本書紀』における保食神(宇気母能加微とも)がハイヌウェレの神話的役割をほぼそのまま演じている。これら、日本の古典にみられるハイヌウェレ型神話像の原像を、吉田は、さらに数千年さかのぼつて縄文期にもとめる。土偶がそれである。

土偶というのは、いうまでもなく、粘土をこねて造形したものを焼いて作った像で、その大部分は人間をかたどつて作られている。このような、ひとのかたちをかたどつた土偶を作るとは、縄文期の早期と呼ばれるもつとも古い時代に始まつたとされ、もつとも新しい時代である、縄文晩期の末までその作成はつづいた。

ところが、約五千五百年ぐらいまえに始まつたとされる縄文中期にはいるとそれまでの土偶のあり方に、にわかに大きな変化が生じた。この時期になると、土偶はその数が急激に増加するとともに形や文様などもそれまでとは比較にならないほど複雑で多様になって、きわめて丁寧に作成されているのだ。にもかかわらず、注目されることには、同時期の土器などとはことなつて、完全な形を保全して出土されることがほとんどない、しかも、同一の場所から発見された破片群をつなぎ合わせてももとの形であつたろうものに復元されることがほとんどないということだ。それはちょうど、ハイヌウェレが神話に語られていたように…。

アメタはそこで、娘の死体を掘り出して、多くの断片に切り刻んだ。そしてその一つひとつを別々に、踊りの行われていた広場の全域に埋めた。

ハイヌウェレのこの死体の断片のおのおのからそれまでになつたいろいろな種類の芋が発生するのだが、それがそこに限定されてのことではなく、世界そのものの起源——ここではこういっておこうか——世界の拓け、に根源的に波及することはすでに述べたところだ。したがつて、縄文中期に作成されだした形態の土偶もまた、ハイヌウェレ神話同様、世界そのものの拓けへの根源的連関を見出さるべきものなのだ。縄文中期土偶のかかる諸特徴について、吉田の紹介はいま少しつづくのであるが、それは次稿につなぎ、そのうえで、問題とされてきている「遮蔽」と関連づけたい。